

# 理数科・英語科の学科連携事業 熊本日日新聞で報道！



## スーパーサイエンスハイスクール 熊本北高

スーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されている熊本北高（熊本市区）は、全校生徒が3年間を通して自ら設定したテーマの課題研究に取り組んでいる。その一環として、本年度から理数科と英語科が連携する試みも始まった。学科の垣根を越えて刺激し合い、幅広い視点を取り入れる狙いだ。

SSHは重点的な理数教育を通して、科学技術を担う人材育成を目指す。文部科学省が指定し、県内では熊本北高のほか、第二高、宇土中・高、天草高、鹿本高が選ばれている。

熊本北高には普通科のほか、理数科と県内唯一の英語科があり、特色ある教育に取り組む。理数科は県内外の先端科学技術研究施設を見学したり、大学教授から実験の指導を受けたりするなど、高度な理数教育を実践。英語科は県内のA.L.T.（外国語指導助手）を交えた英語会館や米国の姉妹校訪問、熊本学連大の留学生との交流などを通して英語力を高めている。

また、SSHに指定される

## 理数科と英語科 研究連携



## 異なる視点 助言し合う

と独自のカリキュラムが組め、熊本北高は3学科が1年から課題研究に取り組む。分野は理数科だけでなく、文学や音楽、アントレプレナーシップ（起業家教育）などさまざまで、2年から本格的な研究に入り、4、5年の進級ごとに聞き取り調査や実験などをし、年度末の成果発表会に臨む。

5月下旬、2年の理数科（40人）と英語科（41人）の生徒らが、互いの研究方針などを発表しあう会を開催した。両科が連携するのは初めての試みだ。

理数科は「フナリアの脳と食べ物」の関わり、導電性プラスチックの合成を研究する班は「化学物質を用いた実験も披露し、英語科の生徒らはなじみのない科学用語などを尋ねていた。班長の古庄健太郎さんは「化学は難しいと思われがち。一般の人にも分かりやすく説明できるようにしたい」と振り返った。

英語科の班は、日本の教育システムの違いについて研究する内容を英語で発表。理数科の生徒から「違いが多そうだから、テーマを絞った方がいい」となど、質問や助言が飛んだ。英語科の永田高樹さんは「気がなかつた指摘をもらえて有意義だった。気になったことは徹底的に調べたい」と手応えを感じていた。

いま、  
学校は

随時掲載

【写真上】導電性プラスチックの合成について、英語科の生徒（右側）に説明する理数科の生徒たち  
【写真下】日本の教育システムの違いについて、研究する内容が理数科の生徒（手前）に説明する英語科の生徒たち

5月、熊本市区

（元村彰）

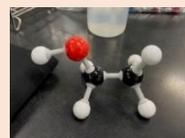
図1 6月8日（木）熊本日日新聞（掲載許諾済）

第Ⅲ期の柱のひとつである共創的課題研究支援体制充実の一環として2学年において、理数科・英語科合同での研究計画報告会実施しました。この様子を、地元新聞社から取材をしていただき、教育面に大きく報道していただきました。

## 文部科学省教科調査官学校訪問

理数科の探究型授業2コマと普通科1年URIのアントレプレナーシップ講座を見学していただきました。その後、合評会を実施し、SSH事業の推進状況も説明しました。調査

官からは、全校体制での協働的な学びの場作り等について評価していただきました。



# SSH NEWS

## 職員研修ハンドブック公開 全国の中高・産学官から多数ダウンロード



図2 職員研修ハンドブックのサンプルページ

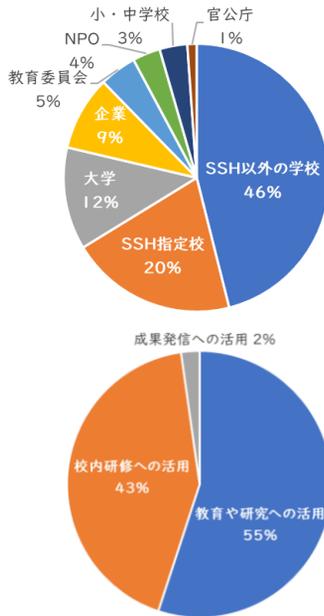


図3 公開2週間のダウンロード状況及び活用目的

本校で実施してきた職員研修や校外での連携事業におけるワークショップ型研修をまとめたハンドブックを本校HPに公開しました。

公開2週間で、サンプルページへのアクセス件数は700回を越え、ダウンロードもすでに100件近くに上っています。北海道から沖縄まで様々な地域の方にダウンロードいただき、さらにSSH校にとどまらず、SSH以外の高校、大学や官公庁、企業の方も高い関心を示されています。

## 科学技術振興機構のSSHパンフレットに 溝上先生の取組みが紹介されました



図4 科学技術振興機構の2023年SSHパンフレット(一部抜粋)

科学技術振興機構が広報のために発行しているSSHパンフレットに本校のSSH研究部長で、指導教諭(スーパーティーチャー)の溝上広樹先生の活動が紹介されました。

全国の教員から、顕著な活動をした1名の活動が毎年掲載されています。記事では、高大社連携の共創ワークショップの様子等が紹介されました。